ティーチング・ステートメント

所属　未来デザイン学部メディアデザイン学科
名前　道尾　淳子
作成日　2022 年 3 月 10 日

【責任】

未来デザイン学部メディアデザイン学科に所属し、文理融合型の学問領域でデザイン思考と二つの PBL（Problem Based Learning/ Project Based Learning）をベースとした教育研究活動を行なっている。主たる教育活動はビジュアルデザイン系科目（アクセシブルデザイン、グラフィックソフト、DTP デザイン、クリエイティブディレクション、視覚心理学など）の担当、地域デザイン研究室でのゼミ生への研究支援、学生のキャリア支援、課外プロジェクト支援である。また大学附属北方地域社会研究所の研究員として、地域デザイン関連の地域貢献活動を学生とともに行なっている。

【理念】

デザインの学びは、人間および生物の多様性を理解し、地域社会に寄り添い活躍し得る汎用性の高い人材の育成に繋がる。

学生と一緒に教員自身も、地域社会への当事者意識をもって多様な価値観に触れ、広い視野で学びを深める・学び続けたいと考えている。まずは大学という学びの場を活用して自分なりの意見や表現を安心して発し、他者と対峙するコミュニケーション機会から学び合いを実感して欲しい。すべての答えを持っている人はいないので、物事の最適解を探るプロセスを面白がって欲しい。他者協働のためには、先駆者や実践者に学びを得て、自らの専門性を高めていく必要があるが、デザインプロセスでは、それが不確かであっても、自分自身で考え進み、出力する・表現することの大切さがある。教員として、学生の学びの火付け役、知的好奇心を支援する、そして、学生一人ひとりの主体性や能動性を引き出せるようなテーマ設定や話題提供、成果発表会等の交流機会を企画運営していきたい。

【方針・方法】

上記の理念を実現するため、下記４つを方針とする。

方針１：授業の双方向性を重視する

- 双方向型授業で学び合う。大学という活動拠点において学友や教員がいる安心感のなかで、人間の多様性を理解し自己効力感を高めてもらう。
- 各回学生の発言機会を可能な限り多く作る。遠隔授業ではチャットによるコメント入力を活用する。作品制作のプロセスや最終プレゼンにおいても、各回事後に振り返りを設定し、必要に応じてコメントを履修生全員と共有する。
- 複数の優秀な学生成果を参考事例に選出して、本人に口頭プレゼンテーションしてもらい、努力している姿勢を正当に評価する。

方針２：デザイン手法の理解から応用・創作へ繋げる

- 講義主体の授業では中間試験を実施する。
- デザインは探究であり、社会やユーザーのあり方に寄り添いながら、物事の最適解を見出し表現するものである。社会通念に囚われ過ぎない柔軟な思考力が必要になる。複数の考え方や手法を示し、フォーマット上に再現するなかで、新たな価値創造を発展的に目指していく。
- 作品や表現の良し悪しよりも、クリティカルシンキングに着目して、ある課題に対して論理的・構造的・段階的にゴールできたかという一連のプロセスを評価する。

方針３：個々の学習ペースを尊重する

- 授業時間において、教科書と教員オリジナルのスライドや動画など授業教材の内容を一括に共有する。授業支援システムやオンライン共有フォルダを活用して、授業時間外の予習・復習時は、学生個人のペースで取り組むことができる。課題や作品提出の方法を明確に伝え、〆切を二段階制にしてブラッシュアップを奨励する。
- 学生が授業全体の流れをその都度把握できるようにする。授業時に何が行われたのか各回の覚書をオンライン上に表記する。
- 授業時間内外での質問は授業支援システムやメールで受け、個別に応える。必要があれば全体にも質問内容をシェアし、フィードバックする。

方針４：授業の学びと実務や社会との繋がりを意識する

- 各テーマに応じて、デザイン実務者や身近な地域活動の実践者をゲスト招聘し、話題提供を依頼している。また顧客やユーザー想定になる学外協力者にも授業参画してもらうことによって、リアリティある、緊張感ある、デザインワークが展開されるよう授業計画を行う。
- フィールドワークを行う。現地に赴く。学外コミュニケーションの機会を設ける。
- 演習系科目では専用教室や設備機器を使用し、実務仕様のアプリ等で技能トレーニングを行う。
- トレンドを取り入れた課題設定を行う。

【成果・評価】

- 基礎段階にある学部 1～2 年生の９割は授業目標達成を実感している（授業改善のためのアンケートの結果より）。
- 授業における課題のプレゼン機会や補講の設定、ポートフォリオ掲載に繋がる作品制作機会の創出は好評である。年２回の作品展覧会開催も学生にとって糧になっている。
- 地域 PBL 型科目の授業内容や学生成果を、学生とともに学内外で発表している。
- 課外プロジェクトや学外コンペに自主的に参加する学生数が増えた。新聞やテレビ、本学トピックスなどメディアに掲載された。

【目標】

- 短期目標では、まずは上記成果を持続させる。教育実践について所属学会発表と論文執筆する（2023 年度）。また機会によっては学生にも参画を呼びかけ実績を積み上げる。
- 授業内容は毎年度見直し最善を考え、改善する。話題性のあるトピック、歴史系譜をもつトピックなど、多方面にアンテナを張り、授業素材の選択肢を増やす。
- 長期目標では、大学の教育研究活動を通じて多様な人々に寄り添いながら、地域をよりよく居心地の良いもの、ワクワクする出来事を生み出し実現できる人材を育成し、社会の多方面で活躍できる人材を輩出する（～2030 年度）。